

『怠惰』 なりアスは苦勞
が少ない。

ふぬぬ（匿名）

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

もし、リアス・グレモリーがとても『怠惰』な悪魔だったらどうなるのだろうか？

これは悪魔らしく怠け者で、少しだけ兄に似て才能のあるリアス・グレモリーの何にもしない物語。

※以前投稿して、削除したものの再投稿となっております。

目次

私は眷属が少ない。(一卷)	1
私は経験が少ない。(二卷)	8
私は敗北が多い。(三卷)	15
私は魔力が少ない。(四卷)	22
私は苦勞が少ない。(最終卷)	30
『怠惰』の従者は苦勞を買い込む。(猫缶)	39

私は眷属が少ない。(一卷)

私は眷属が少ない。

数年前のある日、父上がこう言った。

『レーティングゲームのために眷属を集めなさい』

なんのために？ と聞き返したところ。

『今の悪魔はレーティングゲームの成績による評価が非常に大きい。おまえの将来のためにも、強い眷属を集めて勝利を重ね、良い評価を得るべきなのだ』

まったく父上はおかしなことを言う。

私はグレモリー家の次期当主なのですよ？

父上が決めたことなのにもう忘れてしまったのだろうか？

既にして上級悪魔の名門、元七十二柱のグレモリー家次期当主さまなのだ。これ以上の地位を求めるなんてそんな面倒なこと必要ないと思います。

父上がボケてきているのだとしたら面倒だな。

悪魔の寿命は数万年あるらしい。初代グレモリーのおばあさまからしてまだ死んで

いないのだから、父上が逝くのもずーっと先の話のはずだからと三千年くらいはゴロゴロして暮らそうと思っていたのに……ボケられてしまつては働かないといけないではないか。

ああ、面倒くさいな。

頭を若返らせる薬はないだろうか。

でも、探すのも面倒だから後でいいや。

数年前のある日、母上がこう言った。

『次期当主として、見聞を広めるためにも旅に出なさい』

面倒くさい、と返したところ。

『あなたはまだ一名も眷属がいらないではありませんか。せめてお付き合い程度でもレーティングゲームに参加できるような体裁くらいは整えるべきです。あなたがろくに眷属を集めようとしてもしないのは、他の御家の奥様がたにも知られているのですよ。シトリ一家のソーナさんなどは……』

いつも母上はうるさいことを言う。

旅先で都合よく優秀な眷属を拾ってくるなんてことあるわけがないじゃないですか？

私は上級悪魔の名門、元七十二柱のグレモリー家次期当主さまなのだ。眷属なりた
いつて言ってくる下級、中級悪魔はたくさんいるのです。

母上のお小言はいつも面倒で困るな。

悪魔の寿命は数万年あるらしい。なんで他の同期の悪魔達はそんなに急いで眷属集
めを頑張るのだろうか？ 私は千年にひとりぐらいのペースで良いと思うのだけれど、
みんなが頑張るせいで母上がうるさいではないか。

まったく面倒だな。

とりあえず、ひとりぐらいは眷属をつくった方がいいだろうか。

でも、探すのも面倒だからまた今度でいいや。

数年前のある日、兄上がこう言った。

『猫の妖怪を拾ってきたんだが、眷属にしてみてもどうだい？』

丁度良い、と返したところ。

『少し訳ありの子なんだが素質はバッチリだよ。その子の姉はとても強い悪魔になつた
からね。だからその子も強い悪魔になってリーアの良い駒になると思うよ』

いつも兄上は甘やかしてくれる。

兄上は魔王さまなのですよ？

もっともっと甘やかしてくれていいから、その子の姉も連れてきてくれれば良かったのに。

私は四大魔王の筆頭、現ルシファアの妹なのだ。兄上に任せておけばそれなりの眷族を勝手に連れてきてくれること間違いなし。

兄上の眷属くれないかな。

いつも他の眷属にパシリ扱いされて、忙しい、忙しいってあくせくしてるベオウルフなんて、私のところへ来たたら一番上の立場にしてあげるのにな。

そうしたら面倒なことは全部任せてしまえるのにな。

ちよつとスカウトしてみたらどうだろうか。

でも、会いに行くのも面倒だしそのうちでいいや。

数年前のある日、白音がこう言った。

『私の姉は主殺しのはぐれ悪魔です。それでもここにいていいのですか？』

どうせなら姉も連れてきたら面倒が減ったのに、と返したところ。

『ありがとうございませす。いつか姉さんを捕まえてきます』

白音は姉思いだな。

兄上が言っていた優秀な悪魔なら大歓迎ですよ？

私は名門グレモリー家の次期当主さまで、魔王ルシファーの妹なのだ。わがままを言えば大概のことはなんとかなる。

白音は働きの者で助かるな。

義姉にガミガミ言われぬように、いろいろなことを片付けてくれて本当に助かる。ついでなのでいろいろと面倒なことは全部任せてしまおうと思う。

白音の駒は「やっぱり」兵士”かな。

数が多くて採用するのも面倒だし、八個全部使ってしまったおう。

数年前のある日、ソーナがこう言った。

『私は人間界の学校に通ってみたいのです。そのために人間界にあるグレモリー設立の学校と一緒に通ってくださいませんか？』

面倒くさい、と返したところ。

『グレモリー卿にお願ひしたところ、リアスを連れ出してくれるのなら許可しても良いと言われたのです』

まったく父上は意地の悪いことを言う。

ソーナはシトリー家の次期当主なのですよ？

妙な条件なんてつけないで、その程度のお願ひ聞いてあげればいいものを、まったく

なんでそんな面倒なことを言い出すのか。

だいたい、ソーナもソーナだと思ふ。なんで学校を造りたいなんて面倒なことを考えるのだろうか。そういうことは余所の誰かに任せておけばいいと思います。

ソーナにそんなに頼まれたら仕方ないな。

人間界のグレモリー領の面倒なんて面倒くさいから、人間との契約の仕事も、領地の警備も、学校の運営も、全部やってくれるというのなら一緒に通ってあげようではないか。

まったく面倒くさいがしよがない。

部活とかあるらしいけど、どうしような。

でも、やっぱり面倒だし帰宅部でいいや。

高三の春の日、ソーナがこう言った。

『墮天使とはぐれエクソシストの一団がこの駒王町に入り込んだようです』

全部任せたと返したところ。

『神器狩りを行なっていたようですが、今は町はずれの廃教会に籠もっているだけです
ので監視しています』

まったくソーナは頼りになるな。

私のやることなんてありませんよ？

町の住人にすこしばかりの被害が出たようだが、墮天使たちはそのまま何処かへと去っていったようだ。

セイクリッド・ギア

神器持ちの人間なんて放って置けばいいものを、わざわざ探し出して狩ってまわるなんて、どうしてそんな面倒なことをするのか。

墮天使の行動は理解に苦しむ。

セイクリッド・ギア

神器の力は聖書の神がもたらしたものらしい。そう考えると、悪魔の敵を減らしてくれたのだから面倒が減ったのかもしれない。

墮天使もたまにはよいことをする。

領地に無断で侵入してきたのだから抗議してはどうかと言われたけれど。

でも、やっぱり面倒だししなくてもいいや。

私の眷属は“兵士”の白音しかない。

私は経験が少ない。(二巻)

私は経験が少ない。

数年前のある日、父上がこう言った。

『もつとパーティーなどに出席しなさい』

なんのために？ と聞き返したところ。

『グレモリー家を継ぐものとして結婚相手の選定は重要だ。おまえとの相性もある。出会の機会を増やし、顔を広めるためにも出席しなさい』

まったく父上はおかしなことを言う。

そんなものに出たって、私と子作りしようなんて酔狂な男性がいるとは思えませんよ？

兄上のこともあつたのに、もう忘れてしまったのだろうか？

魔王で強くてルシファーな兄上ですら、相手をひとり捕まえるのにとても苦労したと聞いている。私と付き合えるような相手がそこらに転がっている筈がないのです。

父上がボケてきているのだとしたら面倒だな。

悪魔の寿命は数万年あるらしい。初代グレモリーのおばあさまからしてまだ死んでいないのだから、父上が逝くのもずーっと先の話のはずだからと三千年くらいはゴロゴロして暮らそうと思っていたのに……ボケられてしまつては働かないといけないではないか。

ああ、面倒くさいな。

頭を若返らせる薬はないだろうか。

でも、探すのも面倒だから後でいいや。

数年前のある日、母上がこう言った。

『あなたがあまりにも表に出ないものだから、良くないわさがたっています』

どんな噂？ と聞き返したところ。

『グレモリーの次期当主はあまりにも醜いために表に出て来られないのだとか。とても太つてしまつてトイレに座つたまま生活しているだとか。まだまだほかにもいろいろあるのです。他の御家の方々とお会したときに、どうして出てこないのかと聞かれる母の気持ちが変わりますか？ だいたいあなたは……』

いつも母上はうるさいことを言う。

太つてはいないけれど、表に出られないような姿というのは当たっているじゃないで

すか。

私は母上と父上の娘なのですよ？ いろいろと大変なのだからそういうことは母上
が対処してくれないと困ってしまいます。

母上のお小言はいつも面倒で困るな。

悪魔の寿命は数万年あるらしい。なんで他の同年代の悪魔達は結婚を焦るの
だろう？ 私は千年後くらいからの婚活でいいと思うのだけれど、みんなが焦らせる
せいで母上がうるさいではないか。

まったく面倒だな。

とりあえず、ひとりぐらいは話す相手をつくった方がいいだろうか。

でも、探すのも面倒だからまた今度でいいや。

数年前のある日、兄上がこう言った。

『リーアに会って見たいという男性がいるのだが、一度会って話してみてもどう
だろうか？』

丁度良い、と返したところ。

『私も苦労したからね。リーアの気持ちもわかるつもりだ。だから少し特殊な力
を持った相手を探してきたんだよ』

いつも兄上は甘やかしてくれる。

兄上は、父上や母上よりも私に近い存在なのですよ？ 血統的に。

その兄上のお勧めする男性とは一体どんな方なのだろうか？

私は面倒なことは苦手だから、いろいろなことを率先して決めていつてくれるひとだ
と、いいなあ。

兄上のお勧めだからひどい相手ってことはないだろうけれど。

あんまりかまわれるのも面倒だけれど、全然構ってくれないのも寂しいだろうし。ほ
どほどの距離感で付き合える方がいいのかな。

そうしたら、こんな私でも末永いお付き合いが出来るのだろうか。

ちよつとおしやれもしてみたほうがいいのだろうか。

でも、買いに行くのも面倒だしおまかせでいいや。

数年前のある日、ライザーがこう言った。

『俺は君を縛るつもりはない、君は基本的に自由にしていてくれていい。ただ俺も俺で
自由にやらせてもらえるのなら、俺達ふたりはとも仲良くやっていけると思う。君は
どう思うだろうか？』

どうせなら領地の経営とかもやってくれると面倒が少なくていいのに、と返したとこ

ろ。

『本当に良いのかい？ グレモリーの当主となるのはあくまでも君だよ？ 俺のような余所の家から入ってこようとしている者に領地を任せてしまっても』

兄上のお勧めの男性は流石だな。

私の代理でいいからいろいろとやってみたいだなんて、そんなの大歓迎ですよ？

最近のフェニックス家はなかなか栄えているらしい。三男で家を継ぐことのできないライザーは、本当はいろいろとやってみたかったけれど我慢していたのだからか。

白音に任せられないような問題でも、夫になるライザーだったら任せてしまっても構わないのかな。

自分からやりたがっているようだし、いろいろなことを片付けてくれそうだと本当に助かる。

フェニックス家の特性のおかげで私もあまり気を張らずにいられるし。

ライザーはとても良い相手だな。

他の相手を探すのも面倒だし、もうライザーで決定でいいや。

数年前のある日、白音がこう言った。

『ライザーさまの眷属は女性ばかりみたいです。ハーレムを築いてやりたい放題にされ

ているとか』

別に構わない、と返したところ。

『婚約者がありながらあのような振る舞い。リアスさまが軽んじられているようで気になるのです』

まったく白音は潔癖症で困る。

ライザーはフェニックスの男性なのですよ？

そちらの方面でも不死鳥なのだから、ハーレムでも築いてもらわないと私が困る。

今夜は寝かさないよ、とか言われて朝まで相手をしていたら疲れてしまうじゃないか。まったく相手にされないのも寂しいものがあるから、時々来てくれるくらいでいいのだ。

元気が有り余っている男性を縛り付けるなんて面倒くさい。

私が当主になって、ライザーが代理とか代行とかになるのだから問題ない。

面倒を掛ける分、そのあたりは好きにやってくれればいいのだ。

来週は出会って一年の記念日だけど、何か用意しようかな。

でも、やっぱり面倒だしライザーに任せてしまえばいいや。

数年前のある日、ライザーがこう言った。

『君の変異の駒を譲ってもらえないだろうか?』

どうして? と返したところ。

『眷属に加えたい者がいるんだけどね。手持ちの駒では足りなくてさ。申し訳ないのだけれど君の”変異の僧侶”と俺の”僧侶”を交換して欲しいんだ』

まったくライダーは欲張りだな。

私はレーティングゲームなんて興味ありませんよ?

欲しいというのなら使ってくればいいのだ。使いたいひとが強い駒を使う。適材適所ってことだろうか?

ふと思ったのだけれど、こういう風に変異した駒ばかりを上手く集めてしまえばすごく強い眷族を揃えられるのではないだろうか?

公平性に欠ける気がするのだけれど、開発者の意図はよくわからない。

悪魔の駒を使つて悪魔の数を増やしたいのなら、全部の駒が変異するように調整すればいいのに。

どうしてか気になるけれど聞いてみようかしら。

でも、そのうち何かで会ったときでいいや。

私の交際経験はライダーしかない。

私は敗北が多い。(三卷)

私は敗北が多い。

春過ぎて夏の来ないある日、教会の戦士がこう言った。

『エクスカリバー奪還について一切関わるな』

こつちに迷惑をかけないなら勝手にどうぞ、と返したところ。

『話が早くて助かる。ただ、もしコカビエルと手を組んでいるのなら——そのときはあなたたちを完全に消滅させることになる』

教会の連中は頭がおかしい。

私は悪魔なんですよ？

聖剣なんかと関わりたくないに決まってるじゃないですか。

だいたい、たつたふたりで墮天使の幹部に挑むだなんて。勝てるわけが無いと思う。

自殺だか殉教だか知らないが、そういうことは出来ればよそでやって欲しかった。いろいろ後始末するのはソーナの仕事だから別にいいけれど。

まったく教会の人間は面倒で困るな。

人間の寿命は百年程度らしい。ただでさえ短い命、どうしてそんなに死に急ぐのか理解ができない。命短し恋せよ乙女とか言うそうじゃないか。

私ですらそれっぽい経験をしているというのに、この二人はそういうことも知らずに死んでいくのかと思うと、哀れみを覚える。

忠告くらいしてあげたらいいのだろうか。

でも、やっぱり教会は敵だからどうでもいいや。

すぐ兄上に連絡をしたら、こう言われた。

『急いで向かう。リーアはどこか安全なところに移動しなさい』

もう準備させている、と返したところ。

『それならばいい。気をつけて避難しておきなさい。あとは私に任せておいてくれ』

いつも兄上は頼りになる。

兄上は強いのですよ？

墮天使の幹部と私なんか戦えるわけ無いのだ。

兄上は四大魔王の筆頭、現ルシファーなのだ。兄上に任せておけば強い眷族と一緒に片付けてくれること間違いなし。

果報は寝て待てとか言うそうじゃないか。実家に帰る電車の中で寝てもいいのかな。

起きたら全部終わってるといいのだけれど。

堕天使の幹部とか、ちよつと見てみたいけれど。

でも、やっぱり眠いしどうでもいいや。

移動中にレヴィアタンさまにも連絡したら、こう言われた。

『どうしてリーアたんしか連絡してくれないの!?!』

恥ずかしいらしい、と答えたところ。

『恥ずかしいって……そんな場合じゃないのに！ 待っててねソーたん！ お姉ちゃんがすぐにいくからね☆』

レヴィアタンさまはいつもテンションが高い。

私はいつもけだるい気分なので、ちよつとついていけない。

ライザーには、物憂げでゆつたりとしたところが良いって言われるんだけどな。戦う事が前提の眷属たちには無い雰囲気はたまらない、とか言われるのは誉められているのかな。

今度、レヴィアタンさまとどっちがいいのか聞いてみようかな？

でも、魔王と婚約者の板ばさみで困らせてしまうかもしれないからやっぱりやめておこう。

とりあえず墮天使と戦いで役に立たないのはこっちで決まりだけども。
なんでみんな戦いたがるのかなあ。

ゆっくり寝て、美味しいものを食べて、楽しく遊んで、それで十分だと思っただけ
ど。

そのあたりに困らないひとほど、戦うのが好きな気がする。
なぜなのかって考えてみよう。

ああ、こういうのを物思いにふけるって言うのかな。

しばらく考えてみたけれど。

でも、やっぱりわからないからそのうちでいいや。

数日後のある日、義姉上がこう言った。

『コカビエルは始末したのもう大丈夫ですよ』

どうだったの？ と聞き返したところ。

『まったく、あなたときたらレヴィアタン様まで呼んでいるなんて。ルシファーとレ
ヴィアタン、さらにそれぞれの魔王の眷属が揃い踏みだなんて、コカビエルが哀れに感
じられましたよ』

レヴィアタンさまはソーナの姉上なのですよ？

私は避難したけれど、ソーナが残るって言うのだから仕方が無い。

連絡してなくて、ソーナに何かあったらあとで私が怒られてしまうではないですか。連絡一つで面倒が回避できるのだから、それをしない手はないのです。

レヴィアタンさまが怒ると面倒なのですよ？

まったく義姉上はそのことを覚えていないのかな。

むかしむかしの大昔、義姉上とレヴィアタンさまはライバルだったと聞いたような気がするけれど、忘れてしまったのだろうか？

ライザーから父上用の薬をもらったので義姉上にもあげよう。

また列車に乗るのも面倒だな。

実家に帰ったついでなのでこのまま夏休みにしたいと思うのだが。

『リアスさま？』

で、でも、やっぱり義姉上が怖いので学校に行こうかな。

駒王町に帰ったら、ソーナがこう言った。

『リアス！ レヴィアタン様まで呼ぶことは無いでしょう！』

どうして怒っているの？ と聞き返したところ。

『コカビエルが私を犯してから殺すなどと言ったせいで、危うく町ごと吹き飛ばすところ

でした！ ルシファーさまと違ってレヴィアタンさまは感情で暴走する事が……」
ソーナはいつもうるさいことを言う。

結果的に町が無事でコカビエルも始末出来たのは、すぐに連絡したおかげなんですよ？

レヴィアタンさまは外交担当なのだから、すぐに感情的になつて暴走するなんてことあるわけないでしょう。

だいたい、ソーナもソーナだと思う。魔王の妹つていう重要な立場なのだから、危険だとわかつたらすぐに避難するべき。

その方が眷属たちも安心して過ごせると思うのだけれどな。

学校が半壊しているけれど、この程度なら一日もあれば修復できるんじゃないかな？
昔の約束で、そういうことも全部ソーナ任せだから詳しく知らないけれど。

忙しそうだな。手伝ったほうがいいかな？

でも、やっぱり約束は約束だからおまかせでいいや。

ある授業を受けているとき、先生がこう言った。

『グレモリーさん、春眠暁を覚えずとは言いますが、春も夜明けもとうに過ぎていますよ？』

ビクッ!、と反応したところ。

『グレモリーさんはいつも眠そうですね? 私の授業はそんなにつまらないですか?』

この先生の授業はいつも眠くなる。

ここ数日、果報を寝て待ち続けた私なんですよ?!

どうにも我慢出来ないのです。無理に起きていようとすると、机に頭突きをしてしまうのです。もしくはガタン! とか音を出してしまつて笑われたりするので。

この先生も私なんて放つて置けばいいものを、わざわざ危険物に注意するなんて熱心なんだな。

グレモリーの名前が気になつて見て見ぬフリの人も多いのに。

ちよつと感心したので頑張つて起きていようと思うけど。

でも、やっぱり眠つてしまうのです。睡魔には勝てません。

私の敗戦記録は毎日更新されている。

私は魔力が少ない。(四巻)

私は魔力が少ない。

夏の始めのある日、ソーナがこう言った。

『レヴィアタン様に授業参観のこと話したのは、あなたですか?』

そうだよ、と返したところ。

『なぜですか! 先日の方は緊急事態で仕方が無かったとしても、なぜ授業参観のことで話してしまうのですか!』

ソーナはおかしなことを言う。

レヴィアタンさまは、セラフォルーさんで、ソーナのお姉さんなんですよ?

学校生活を体験したいって言ったのはソーナなのだから、授業参観に家族が来るのは当たり前じゃないですか。

他の模範になる生徒会長さんが、家族に秘密にしておくとかよくないと思います。

というか、毎回聞かれるのが面倒なので学園の年間スケジュールを渡したのだけだ。いろいろ考えて、行事の日程を組んで、日程表を作って満足そうにしていたのは

ソーナだったのに忘れてしまったのだろうか？

まさかソーナも父上や義姉上と同じ病気なのだろうか。

父上、義姉上、ソーナと次々にかかってしまうなんて、なんて恐ろしい。

ソーナが重症にならないうちに、またライザーに薬を頼まないといけないな。生徒会長がダメになったら私の出番が来てしまうかもしれないじゃないか。

万能の治療薬というくらいだし、効果あるよね？ フェニックスの涙。

一度自分でも試してみようかな。

でも、やっぱり値が高いからやめておこう。

夏の始めのある日、椿姫がこう言った。

『とても忙しいのです』

うん知ってる、と返したところ。

『とても忙しいのです。ええ、とてもとても……』

言いたい事があるのならはつきり言えばいいのに。

言葉にしなくては伝わらないことってたくさんあるのです。副会長さんのコミュニケーション能力に問題があつては困るな。

”王妃（クイーン）”は”王”と共に王冠を頂く者なのですよ？

他の駒とは役割が違って、言うことを聞くだけの部下ではないのだ。隣に立って相談、忠言し”王”を支えるのが役割。

”王(ソーナ)”がボ、物忘れしたらフォローをし、道に迷っていたら一緒に考え、家族に不義理な行動を取っていたら正してあげるのが役目ではないだろうか？

まったく、”椿姫(クイーン)”も困ったものだな。

椿姫がしつかりしてくれないから、私がソーナに絡まれてしまうのだ。

一言いってやろうかと思っただけだ。

でも、やっぱり反撃されそうなのでやめておこう。

夏の始めのある日、兄上がこう言った。

『三すくみの会談をこの学園で執り行おうと思っただけね』

聖書関連ならヨーロッパでやった方がいい、と返したところ。

『たしかに、それもそうだね。聖書に関わる勢力の会合としてはそちらの方がふさわしいな』

たまに兄上もおかしなことを言う。

天使も悪魔も堕天使も、本場は西洋なんですよ？

わざわざ日本の神々との間で調整してまでして、ここでやる必要なんて無いと思う。

それにミカエルとかアザゼルなんかが近くに來たら、いつ光の槍が飛んでくるかとビクビクしながら過ごさなきやいけないじやないですか。

四六時中気を張つてるなんて面倒なこと、私には耐えられません。

そりゃあ、兄上くらいに強ければ光の槍なんて怖くないのかもしれない。

なんと言つても悪魔の中に三名いるという超越者の中でも一番なのだから。

ライバルのアジュカさん押しつけて魔王筆頭のルシファーになつたし。もうひとりの超越者は辺境に追いやつたつて言うし。

そんな最強悪魔の兄上なら、天使長も墮天使総督も平気なのかもしれないけれど、私程度ではそんな風には思えないな。

練習すれば強くなれるとか。

リーアには才能があるとか言われたけれど。

でも、やつぱり兄上には遠く及ばないや。

幼い頃のある日、兄上がこう言つた。

『リーア、魔力を操る練習をしようか』

なんのために？ と聞き返したところ。

『滅びの魔力は強力だ。私はその力を自在にコントロールすることで、現在の魔王の地

位にまでなつたんだ。だからリーアも練習しよう』

私は兄上が大好きだ。

兄上こそが私の目標なのですよ？

だから、どうか兄上の全力を見せてもらえないだろうか。

尊敬する兄上、偉大なる篡奪者、現代最強の悪魔。兄上のことならいくらでも話して
いられる。

だから、その力を見せて欲しいと願ったのは間違いではないはず。

だけど、ああ、だけれども、あんなことを頼んだから面倒なことになったのだ。

力の差がありすぎた。同じ親から生まれた兄妹なのに、どうしてこんなに違うの
だろうか？ 私と兄上の何が違ったのだろうか？

兄上と比べたら私なんて無能と同じじゃないだろうか。

幼い頃のある日、わたしはいろいろなものをなくした。

その中には自信だったり、やる気だったり、そんな風に言われるものも含まれて
いたのかもしれない。

あの日の前に戻れたらなんて、そんな風に思うこともあるけれど。
でも、とりあえず面倒だから今のままでいいや。

幼い頃のある日、母上がこう言っていた。

『私はあの子がなぜあんなったのか……わかりません』

それに対して変異体、悪魔と言っていていい存在なのか悩むと、返答があった。

『なぜ、あんなってしまったのでしょうか？ 人の形をした滅びのオーラ、ただ在るだけで周囲を消し去るもの』

父上、母上なにを言っているのですか？

誰がなんなのですか？

人の形をした滅びのオーラ？

ただあるだけで周囲を消し去るもの？

わからない、わからない。

それはいつたいなんですか？

あの子って誰ですか？

ウソだ。

本当はなんだかわかってる。

それは兄上のこと。

それは私のこと。

兄上と同じになれて嬉しい気持ちもある。

でも、やっぱりいつもお化粧して生きるのは面倒くさい。

数年前のある日、ライザーがこう言った。

『実際のところ、君の相手が務まるのはフェニックス家の者くらいかもしれない』

そうでしょうね、と返したところ。

『正直、俺も怖いと思つているところがある。グレイファイア様という前例があるにしても男女の差もあるしね』

義姉上はすごいと思う。

兄上の真の姿はああなんですよ？

そういうことをするとき、うっかり興奮しすぎてしまったら？ それで化粧がはがれてしまったら？

子供が出来たとして、その子もそうだったら？

恐ろしい想像はいくらでも出来る。

兄上は魔王なのだ。強くて、ルシファーで、まあカッコいいと言つてもひいきではないと思う。

だというのに、ハーレムが当たり前の悪魔男性としては珍しい一夫一婦の関係。いろいろあったのだろうな。

ライザーも勇気があると思う。

私もそうだったわけで、子作りするには入れないといけないわけで、もしかすると消滅してしまうかもしれないわけで……。

不死身のライザーが居てくれて良かった。

本当に良かった！

やっぱり、私の相手はライザーしかないや。

私の魔力は兄上の半分しかない。

私は苦勞が少ない。(最終卷)

私は苦勞が少ない。

夏休みのある日、レイヴェルがこう言った。

『おねえさま、一緒におでかけしませんか?』

面倒くさい、と返したところ。

『あら、ダメですわよ。以前お誘いしたとき、今回は面倒だからまた今度とおつしやったではありませんか。またの今度とは今のことですわ。約束、守って下さいますわよね?』

レイヴェルはこういうことを言うから困る。

また今度はいつかそのうちであつて、今でも今日でも明日でもないのですよ?

義妹はかわいいが、だからと言ってなんでも言うことを聞いてやっつてはダメなのだ。そんなことをしては働かないダメ悪魔になってしまう。

現にレイヴェルと来たら眷族を集めもせず、かといって誰かの眷属になってレーティ

ングゲームに出るでも無し。毎日楽しくわがまま放題。まったく誰に似たのだけか。

出かけるということは、お化粧を頑張らないといけないわけで。

私は兄上と違って制御が甘くて、破壊力だけは高いから大変なのだ。

パワータイプと言われているのに、魔力の量は兄上の方がずっと上とはどういうことなのか。普通はテクニクタイプの方が低いものじゃないんですか？

もう、面倒くさいな。

今日の容姿はどんな風にしようかな。

いつもはライザーの好みで変えているのだけれど。

今日はレイヴェルにおまかせでいいかな。

『やっぱり私のものと似たようなドレスが似合う姿に……。でも、ああいうのもいいですわね。でも、でもこういうのも……。』

義妹にまかせたら余計に面倒なことになった。

ずっと昔のある時、“革命の指導者”がこう言った。

『ああ、グレイフィア、グレイフィア！なぜ君は、ルキフグスなんだ？あの者たちと縁を切り、家名を捨てて共にきてくれ！もしもそれが嫌なら、せめて私を愛すると

誓つてくれないか。そうすれば、私もグレモリーの名を捨てて、君にふさわしい名を名乗ろう』

無言のままの”宰相グレイファイアの娘”。

”サーゼクス”の言葉が続く。

『私にとつて敵なのは、君の名前だけ。たとえルキフグス家の者であつても、君は君だ。『ルシファー』——君が共にあるのはその名前しかないのか？ ああ、ただその名前に縛られて。ただその名前のために君と一緒になれないなんて。君がルキフグスの名を捨てられないのなら、私が君のルシファーとなろう。光をもたらすものとなり、光避ける君の盾となろう、そして、私のこのグレモリーの名前の代わりに、君の全てをくれないか』

兄上役の言葉に答える義姉上役。

『あなたの名前、たしかに頂戴いたしました。ただ一言、私に命じて下さい。そうすれば、私はあなたのもの。新しいルシファーと共に歩む、あなたのルキフグスとなりましょう』

初めて見たときは意味がわからなかつた。

二回目は感動した。

三回目ときは、これが人間の作品のパク……いや、よそう。面倒なことは考えたく

ない。

兄上と義姉上のラブロマンスを元にした演劇。

レイヴェルに連れ出されて見たのだけれど。

新作やら、新解釈やら、主役が交代したからとか、ことあるごとにグレモリー家の面々は招待を受けているのですよ？

興行収入の一部がグレモリー家に流れてくることもあつて断りづららしく、面倒なことに私まで出かけなくてはならないことがある。

私はこれで七回目だけれども、父上たちは何回息子のラブロマンスを観てきたのだろうか？

正直、もううんざりです。

当の兄上達に聞いてみると、あんなに甘いものではなかったと言うし。

レイヴェルに聞いてみると、すごい回数を観ていた。

好きなひとは何回でも観たいとは聞いた事があるけれど、理解に苦しむものがある。

まあ、他の同期たちがやつてることに比べたら、全然面倒ではないのだけだ。ど。

でも、やっぱり劇場まで来なくてもいいやと思う。

同期の若手悪魔が集まったとき、ルシファアさまがこう言った。

『集まった若手の悪魔同士で、レーティングゲームをしてみよう』

私もですか？ と挙手すると。

『リアスは眷属と合わせても二名しかメンバーがいない。それではさすがにゲームにならないから、参加させられないな』

ルシファアさまから、試合への参加を却下されてしまった。

とてもとても悲しいことです。

まあ、そうですね？

”王”と”兵士”の二名だけでレーティングゲームとか無理に決まってるじゃないですか。

やった、これで夏休み中ゴロゴロし放題だ。八月の終わりまで寝て過ごせるなんて、なんて素敵なことだろう。

よくよく聞けば、今後も相手を変えながら何試合もやっていくそうで……。

ソーナたちは大変だなあ。

今までも、忙しい忙しい言っていたのにさらに行事が追加されるとか。

でも、ほらソーナは将来的には、学校を造って経営しながらシトリーの当主としての仕事もこなし、レーティングゲームも頑張った上に、レヴィアタンさまの相手もすると

言う忙しい日々が待っているのだ。

それを思えば、人間界に居る間なんて楽勝楽勝。

でも、私だったらそんなのやりたくないや。

やっぱり面倒なことほしくないのが一番。

パーティのあつた日、白音がこう言った。

『捕まえました』

何を？ と聞き返したところ。

『にはやは、ゴロゴロしているだけで美味しいご飯と、お給料にありつけて、さらに強い子種がもらえるかもしれない所があると聞きまして』

白音のお姉さんらしい。

連行されていったけど大丈夫なのだろうか？

どうも事前にある程度話がつけてあつたらしい。

白音は働き者だな。

取引とか、禍カオス・ブリゲードの団の情報とか言っていたけれど、私にはあんまり関係ないのかな。

白音の姉は働き者ではなかった。

でも、気が合うというかなんというか。やりやすい相手ではある。

一緒にボーっと月光浴(ひなたぼっこ)していたら朝になつていたこともあった。聞いてみたら、はぐれる前は「僧侶」だったとか。

すでに駒が使われている場合はどうするのだろうか。前の主の駒が効果を残しているのなら、そこに「戦車」重ねたらつよいのかなとか。

いろいろ考えたけれど。面倒だから「僧侶」を二つ押し込めばいいや。でも、やっぱり不安だからアジユカさんに聞いてみよう。

大学を卒業した日、婚約者がこう言った。

『ならばこう命じよう、我が^{クイーン}王妃となれ』

さて、宰相の娘は^{グレイフィア}ここでなんと返したかな？

いろいろなパターンがあるのだけれど、そのまま真似るのもどうかと思うので。

「私もあなたに命じましょう。我が^{クイーン}王妃となれ、と」

そう返した後、思わずふたりで笑ってしまった。

トレードの間までかけて、ユーベルナを「女王」ではなく「僧侶」にしたときからずっと考えていたのだろうか？

人間のものを真似た劇、その劇を真似たプロポーズ。

受けた相手の返答は、これまた人間を真似た「配偶者^{クイーン}」の証の交換。

私も大概だと思っているけれど。ライザーも結構面倒くさがりよね。

もっとオリジナリティを出してくれても良かったんですよ？

それでも、うん。

兄上の恋愛劇から引つ張ってくるってどうなのかと言おうかと思っただけれど。

でも、やっぱり嬉しいからいいや。

長い年月が過ぎたある日、子供たちがこう言った。

『母上、私たち兄弟姉妹でチームを作ってゲームに出ることにしました』

気をつけてね、と返すと。

『大丈夫ですよ！ 私は母上の滅びの力と、父上の不死身の力をもっているのですよ？

グレモリー家の次期当主と、その弟妹なのですから』

まったく、眷属を集めるのが面倒だからって身内で固めることは無いのに。

誰に似たんでしょうね？

我が家は子供が多い。

私が産んだ子は多くないが、ライザーの子供が多いのだ。

よくよく考えたら当たり前なのかな。

何もしなくても上級悪魔になれるのは、私の子だけだから。変な悪魔の眷属になるよ

りも、身内で固めた方が確實ではある。

あの子達が昇級して上級悪魔になれば、任せられることも増えるだろう。

そうしたらライザーの手も空いてくるだろうし、しばらくふたりで旅行にでも行こうかな。

『ああー、黒火の頭が吹き飛んだー!』

練習で大怪我しても、治療しなくていいっていいわよね。

やっぱり、不死身の子供達は手が掛からなくていいや。

『怠惰』な私は子供がいっぱい、しあわせいっぱい。

『怠惰』の従者は苦勞を買い込む。(猫缶)

若いうちの苦勞は買つてでもしろ。

貧しくとも幸せだったころ、姉さまにこう言つた。

「もつと、おいしいものが食べたいな」

言つてしまった。

「ごめんね、白音。ひもじい思いをさせて……私にもつと力があつたら……、力があつたらよかつたのにね……」

私は、なんてバカなことを言つたのだろう。

姉さまは私を食べさせるために一生懸命だったのに。

父の顔も母の顔も知らない。私には姉さましかいなかった。

寝るときも食べるときも遊ぶときも、いつも一緒に、いつも面倒をかけて、いつも甘えていた。私の帰るところは姉さまのところ、私の頼れる相手は姉さまで……。

だけど、姉さまに頼る相手はいなかった。

「白音。私、悪魔になるね。転生悪魔、上級悪魔の眷属になって、うんと強くなって、たくさんお金をもらって、それでおいしいもの食べようね」

頼る相手のいない姉さまは、自分を悪魔に売り渡した。

そうして、大きな大きな悪魔の家に住んで、暖かい寝床とおいしいご飯をもらえるようになった。飼い猫になった私達はすこしの間だけ不自由なく暮らすことができた。

飼い猫になって、帰る家と、安全に眠ることのできる場所と、満足な食事を手に入れた代わりに、姉さまとあまり一緒にいられなくなった。

強くなるのだと言っていた。うんと強くなって独立するんだと。

「そのために、私はいろいろなことを覚えなくちゃいけない。妖術の扱い、魔力の運用——仙術も使えるかもしれない」

そう言って、姉さまは私と遊んでくれなくなった。

『はぐれ』が四回目の追撃部隊を壊滅させたと聞いたころ、サーゼクスさまがこう言った。

「妹の眷属になる気はないかい？ 才能はあるんだが、どうにも面倒くさがりな子でね、助けになつて欲しいんだ」

どうでもよかった。どうなつてもよかった。私なんか死んでしまつてもよかった。

そのときはそう思っていた。

だから、その言葉にうなずいた。

姉さまに捨てられた、置いていかれた私を拾ったのはサーゼクスさまだから。

連れて行かれたお城で出会った、私の新しい飼い主。サーゼクスさまの妹のリアスさまは、私に何も言わなかった。

何をしろとも、強くなれとも言わなかった。

それは、とてもありがたかった。そのころの私は心がぐちゃぐちゃで、とても何かをできる状態ではなくて、何かをしようとも思えなかっただろうから。

何もしない、何も話さない日々が過ぎて、私はふと気付いた。

何もしなくてもおなかは空くんだと。

何の役にもたっていないのに、毎日ご飯だけは食べていた私。

死んでもよいなんてウソだった。

それに気付いたら、急に怖くなった。役に立たないと捨てられて、ひとりぼっちになつてしまうことが怖かった。ひとりで死んでしまうのが怖かった。

もう、姉さまに会えなくなつてしまうことが怖かった。

怖くなって、リアスさまに聞いてみたところ。

「あなたがここにいるということ、それだけで意味があるの。何もしなくても充分役に立っているから、気にしなくてもいいわよ」

姉さまは強くなれと言われて、強くなるうとして、強くなって。そうしてあんなことになってしまったから、もし強くなれと言われたら怖かったと思う。

でも、何も言われないことも怖かった。

私はどうしてここにいますか？

あなたは私に何も望まないのですか？

何も言われないのは、私が役立たずだから？

それとも私が「主殺しの黒歌」の妹だから？

サーゼクスさまに言われて引き取っただけで、本当は邪魔だと思っているのですか？

数年前のあの日、リアスさまにこう言った。

「私の姉は主殺しのはぐれ悪魔です。それでもここにいていいのですか？」

返ってきた答えは思ってもみなかったもので、

「どうせなら姉も連れてきたらよかったのに……」

びっくりした。

主殺しのはぐれ悪魔。追撃の部隊を何度も壊滅させた最悪のはぐれ。はぐれの中で

も最大級に危険で、ついには悪魔たちが追いかけるのやめた黒歌を連れて来いだなんて。そんな風に言われるとは思わなかったから。

びつくりしたから、どうしてそんなことを言うのか聞いてみたところ。一緒に来ているれば姉妹一度に眷属にできて楽だったのに、と返されて私はまたまたびつくりさせられた。

凶悪犯な裏切り者で、悪魔の世界の犯罪者な私の姉さま。リアスさまは、それを眷属に迎えても良いと言ったのだ。

むしろそんなに優秀な悪魔なら大歓迎で、元の主の親族などが何か言ってきたら、魔王サーゼクス・ルシファアの妹という立場を利用して黙らせてやるとも言ってくれた。

そんなことをしたら、きつと悪魔の貴族社会での評判はとも落ちてしまうはずなのに、全然気にした様子も無く、当たり前のようにそう言ってくれた。

——グレモリーの一族は身内に甘い。

そんな話をどこかで聞いた事があるけれど。もしかして、リアスさまは私のことも身内だと思ってくれているのだろうか？ だからそんなに優しい言葉をかけてくれるのだろうか？

「ありがとうございます。いつか姉さんを捕まえてきます」

泣いてしまいそうになるのをこらえて、私はリアスさまに誓った。いつかきつと姉さ

んを連れてくると。

数年前のあの日、リアスさまはこう言った。

「白音の駒は『兵士』八個ね」

びっくりした。

リアスさまにはいつも驚かされてばかりだ。

悪魔の駒にはそれぞれに価値がある。『女王』が九で、『戦車』が五、『僧侶』と『騎士』が三で、『兵士』は一。リアスさまが私に与えると言った『兵士』の駒は一番価値の低いものだが、八つ全部となると駒価値の合計は『女王』に次ぐものとなってしまふ。

私は一応はそれなりの上級妖怪なので、『兵士』一つでいいとはいかないのだろうけれど、それでも八個は多すぎる。

多すぎると言ったのだけれど、リアスさまは「面倒だから」と聞き入れてくれなくて——『兵士』八個の眷属悪魔となった。

これは『僧侶』二つの姉さまよりも大きな価値を認められたということ。私は、私を認めてくれたリアスさまに恥をかかせないよう、与えられた駒に見合うだけの働きを示そうと思った。

「黒歌の妹の白音」として色々と言われることもある私だけれど、「リアス・グレモリー

の『兵士』を全部もらった白音」となってからは、少なくともグレモリー領内では陰口を言われることがなくなったのだから。

きつと、多分、これはそういうことなのだろう。

だから私は、リアスさまのため、自分と姉さまの将来のため、精一杯頑張ろう。

数年前のあの日、リアスさまから仕事をもらった。

「すげ〜……たくさんです」

リアスさまが、グレモリー家の次期当主として任されている仕事の内、眷属にやらせても問題のないものを全部を渡された。

領地の経営に、悪魔の人事（？）、税金その他いろいろ。リアスさまは「父上に押し付けられた」と言っていたけれど、それだけ期待されているのだと思う。

そして、その中からたくさんを任された私も、リアスさまから期待されているのだ。

期待に応えようとは思うのだけれど、これまでの私は長い野良猫生活では姉さまの世話になってばかりで、飼猫時代にも特に何かを学んでこなかった。

やるやると言っておきながら、いざ任されると何もできないことに気付いた。恥ずかしい。

どうしようかと困っていたら、グレイフィアさまが暇を見つけては色々教えてくれた。あの方もいろいろとすごい、魔王のメイドは伊達じゃないのだ。

いろいろと迷惑をかけて、いろんな方に習って仕事を覚えた。

そうして、リアスさまに渡された仕事の中から「はぐれ悪魔の調査」という項目を見つけた。

「白音が自分でやるって言ったのよ？」

確かに言った。「姉^{はぐれ}さん^を捕まえてきます」と言った。

私がグレモリー家の仕事として、姉さまを探すことができるようにしてくれたのだ。予算もある、人員を手配することもできる。

あの日と違って、今日は涙を止められなかった。

数年前のある日、リアスさまにこう言った。

「ライザーさまの眷属は女性ばかりみたいですよ。ハーレムを築いてやりたい放題にされているとか」

ライザーさまは名門フェニックス家の方で、不死身の資質を強く受け継ぎ、悪魔としては比較的まともな性格をされているが、それでも、

「婚約者がありながらあのような振る舞い。リアスさまが軽んじられているようで気に

なるのです」

そんな私の憤りに対して、リアスさまから返ってきたのは、男ならむしろそれぐらいの方が良いという答えだった。

相手を縛り付けても良いことなどないし、ある程度好きにさせておけばいいのだと、最後には自分のところに帰ってくるに決まっているのだからと。

本当に、なんとも思っていないような余裕の表情で、リアスさまはそう言った。

その後、来週は出会って一年の記念日だからライザーさまが何か用意するだろう、とリアスさまが言っていたのだけれど、本当にそうなった。

ライザーさまは結構マメらしい。

リアスさまは余裕があつてカツコいいなと思った。

少し、憧れた。

記念日から少したったところ、私は秘密を知ってしまった。

「リアスさま……まっ？」

リアスさまのすっぱい顔を見てしまったのだ！

びっくりした。

リアスさまにはいつも驚かされてばかりだ。

とんでもない魔力の塊、うかつに近寄ればそれだけで死んでしまいそうな恐ろしい雰囲気。あらゆるものを消し飛ばす滅びのオーラの集合体。それがリアスさまの本当の姿だった。聞けばその魔力は、大戦で亡くなった先代ルシファーさまの五倍にもなるのだとか。

驚いて、それから納得した。

なるほど、こんなにすごい力をもっているのなら、「はぐれ悪魔の黒歌」やその妹なんか怖くもなんともないだろうと。

「あの……ライザーさまはこのことをご存知なのですか？」

リアスさまの回答は肯定。

尊敬した。すごいと、単純にそう思った。

リアスさまの「これ」を知っていて抱きついたり、キスしたり、そういうことをしたりできるって……ライザーさまはなんて度胸があるのだろうか。

私の中でフェニックスの評価は急上昇だ。

駒王町にコカビエルがやって来たとき、リアスさまから逃げる準備をするように言われた。

「墮天使の幹部ということですが……リアスさまなら問題ないのではないですか？」

リアスさまはいつもの口癖の後に、サーゼクスさま達と長年やりあっている墮天使の幹部に勝てるわけが無いだろうと言った。

それもそうだと思った。

聞けばサーゼクスさまは、先代ルシファーさまの十倍もの魔力を持っているのだとか。さらに、そのサーゼクスさまとライバルだったというベルゼブブさま、見渡す限りの平原を凍りつかせてしまうレヴィアタンさま、リアスさまがとても尊敬していると言うアスモデウスさま。

これだけの方々がいて何百年も決着がつかないのだ、きつと墮天使の幹部というのは指先一つで町を吹き飛ばすくらいするのだろうか。

私も少しは強くなったつもりでいたけれど、世の中にはまだまだとんでもない怪物がたくさんいるのだ。

冥界に向かう道中に、リアスさまがレヴィアタンさまに連絡していた。「念には念を」ということらしい。

帰って来たとき、駒王町は原型を留めているのだろうかと心配になったが、そのあたりは「ソーナに任せておけばいい」らしい。

私は知らないのだけれど、もしかしたらソーナさまもリアスさまのような力を持っていて、先代レヴィアタンさまの五倍くらい強いのかも知れない。

リアスさまの親友ということだし、きつとそうなのだろう……なのだろう。
椿姫さん、ごめんなさい。後はおまかせします。

ようやく姉さまを見つけた日、私は暴れ回った。

「どうして……！ どうしてなんですか姉さま！ はぐれ悪魔だけではなくて、テロリストになつてゐるなんて！」

調べてきてくれた部下に八つ当たりをしてしまった。情けない。謝らないと……。

各地の神話群に戦いを仕掛けてゐる無法者の集まり「カオス・ブリゲード禍の団」。姉さまはそこにいたのだ。

カオス・ブリゲード禍の団は、三大勢力の会談が行なわれたときにも現れて随分暴れ回ったと聞いている。そんなところに所属してしまつた姉さまを果たしてリアスさまは受け入れてくれるだろうか？

面倒ごとを嫌う方だから「やっぱりダメ」と言われるかもしれない。リアスさまが良いと言つても、周りの反対がよりいっそう強くなるかもしれない。

「バカ！ バカバカバカバカバカバカバカ……、姉さまのバカッ！」

結果として、姉さまがテロリストになつていたことが後々良い方向に働いたのだから、世の中というのはどうなるかわからない。

調査員を介して、姉さまと何度か話をした。

『ゴロゴロしているだけでご飯にありつけて、お給料もでるとか……そんな美味しい話は信じられないわね』

「本当、なんです。姉さまなら、きつと、リアスさまとも気が合います」

『世間知らずの、苦労知らず、おまけに無能と評判よ？ そのリアスさまはさ』

「世間ずれして、苦労して、おまけに凶悪な犯罪者と評判です。私の姉さまは」

『いつも私の後をちよこちよこついできてたくせに、生意気なことを言うようになったわね』

「そうでなければテロリストとなんて、怖くて怖くて話せません」

『ね、ね、白音。そのライザーとかいうフェニックス家の男。実際のところどうなの？』

「どうなのって？」

『強いのか？ 顔は？ 性格は？ 私相手に怯えたりしないかにや？』

「強さはそれなり。顔は好みによるけど整っているって言ってもよいかな。性格は……スケベで、それなりに覇気があり、女性にはマメ。姉さまくらいに怯えたりはしないと

思う」

『不死身の特性って遺伝するのかしら？』

「多分……詳しいことは聞いていないけれど、ライザーさまのお母さまはフェニックス家の方ではないはずだから……」

『純血悪魔同士なら確実ってことね。転生悪魔だとなのかわからないけど、頭を何度も吹き飛ばされても平気な再生能力っていうのは魅力的ね』

「姉さまには、その……裏切り者になってももらわないといけないんだけど……」

『禍カオス・フリゲートの情報をできるだけ探って来いってことですよ？』

「うん……」

『いいわよ。白音がそこまでお膳立てしてくれたんだもの。禍カオス・フリゲートの団にいたのも、別に主義主張に共感していたとかじゃないしね』

「ありがとう、姉さま」

『お礼を言うのは、私の方のなんだけどね。ありがとう、白音』

冥界でパーティーのあった日、姉さまとようやく再会した。

「久しぶりね、白音」

通信でのやりとりではない、姉さまの声。

嬉しくて、また泣いてしまった。

私は今日も苦勞を買って出る。

「リアスさま！ なにか仕事はありませんか？」